

安城の歴史を現代に伝える情報誌

れきしみち

2. 安城の文化財ーモノ語り名品展Ⅲー
4. 松平シンポジウム (12 月開催)
6. 村絵図を歩く 16
8. 下半期常設展示室替え紹介記事

2016.04
No.100



Anjo city museum of History



Kago taishi



Sakura



Maruhei box



Human face earthenware

特集：安城の文化財ーモノ語り名品展Ⅲー

写真：薬師如来坐像（県指定文化財）



Spring



Hoe



安城市
歴史博物館

Anjo city Museum of History



安城松平家のコーナー

松平氏の居城だった安城城（安祥城址）のとなりに立つ本館として、なくてはならないのが、徳川家康の先祖と安城との関係を紹介する安城松平家のコーナーです。今回の展示替えて松平氏の系図と分布図が一新されました。着実に分家を増やしながら勢力を拡大した様子がわかります。安城松平家からは、大給・桜井・藤井などの分家がでています。

安城松平家初代の親忠が伊賀八幡宮（岡崎市）へ奉納した熊毛兜や、同じく三代信忠の画像、四代で家康の祖父にあたる清康の画像（いずれも複製品）も展示しました。系図のどこに出てくる人物なのかを、確かめながらご覧になるのをお勧めします



女万歳師の掛軸

正月前などにマスコミからも取材の問い合わせがある三河万歳。博物館では常設展示で紹介しています。このコーナーは全ての資料を入れ替えました。関東地方の訪問先が記されている檀家帳や、陰陽道の土御門家が発行した職札は、三河万歳を知る上で欠かせない古文書です。江戸やその周辺に出かけて行く三河万歳の実態を知る手がかりになるものです。

万歳師の姿を描く掛軸の万歳図や錦絵からは、全盛期の三河万歳の様子が伝わってきます。今回の万歳図は、宮川一笑が女性の万歳師（おそらく三河万歳をまねたもの）を描いています。それほど三河万歳がもてはやされていた、ということなのでしょう。「春のにぎわひ」と題する歌川国芳の錦絵には江戸の町を歩く太夫・才蔵の姿がみえます。



弥厚邸模型の中の人物

昨年生誕 250 年を迎えた明治用水の祖都築弥厚のコーナーは、記念の特別展で掲示していたパネルなどを、常設展示に活用しました。弥厚の生涯を紹介した年表は以前よりもわかりやすくなりました。用水計画の関連には赤丸がついています。「新開用水計画検分順路推定図」のパネルは、現在の地図に弥厚の用水計画と明治用水の流路を載せたもので、両者が随分違っていることがわかります。

弥厚の屋敷の模型も常設展示に登場です。たくさんの使用人がくらす長屋や酒造りの蔵などが並ぶ様子は、この地域の実力者だった弥厚を象徴しているようにみえます。縁側にこしかける人物も表現されていて、「これが弥厚さんかも」などと想像してしまいます。

祝！

「博物館ニュース」が 100 号を迎え
「れきしみち」にリニューアルしました！

1991年4月に創刊されたB5版「博物館だより」が、1997年6月号に「博物館ニュース」とタイトルを替えA4版となり、25年に渡りご愛読いただきました。そして2016年4月号の100号を記念して「れきしみち」とタイトルをリニューアルしました。

これから安城の歴史情報を中心にお届けいたしますので、お楽しみに！



B5

A4

安城市民ギャラリーよりお知らせ

愛知県美術館・愛知県陶磁美術館
平成28年度移動美術館「水のある風景」



【開催期間】
平成28年6/11(土)～7/9(土)
10:00～17:00.月曜日休館
(6/11の初日は10:00～)
【関連事業】
● 記念講演会
6/11(土) 11:00～12:00
場所：安祥公民館大会議室
● 展示説明会
6/25(土) 11:00～14:00

愛知県美術館と愛知県陶磁美術館のコレクションで構成される展覧会で「水のある風景」を基本テーマに、古代から現代までの、日本画、油彩、版画、立体、陶芸などの各ジャンルの技法による、自然の情景や身の回りにある水にまつわる表現をご覧ください。

安祥文化のさと

安祥文化のさととは安城市にある松平氏四代 50 年の居城跡を整備した安祥城址公園一体の名称です

[全館共通事項]	
住所 / 〒446-0026	愛知県安城市安城町城堀 30 番地
休館日 / 毎週月曜日 (祝日の場合は開館)、年末年始 (12/28-1/4)	
安城市歴史博物館	開館時間 / AM9:00～PM5:00 TEL: 0566-77-6655 FAX: 0566-77-6600
安城市民ギャラリー	開館時間 / AM9:00～PM5:00 TEL: 0566-77-6853 FAX: 0566-77-4491
安城市埋蔵文化財センター	開館時間 / AM9:00～PM5:00 TEL: 0566-77-4490 FAX: 0566-77-4491
安祥公民館	開館時間 / AM9:00～PM9:00 TEL: 0566-77-5070 FAX: 0566-77-6062
安祥城址公園	TEL: 0566-71-2244





薬師如来坐像（桜井町印内地区）

護国の仏として、また病氣平癒の仏として知られる薬師如来は、古代寺院や天台宗寺院において本尊とされることが多く、古くから信仰を集めてきました。市内には、平安時代に作られた印内薬師や室町時代の作とされる高棚薬師など古代・中世にさかのぼる薬師仏が残されています。

第4話 信ずれば…

—薬師如来像—

から明治初期の桜井村の社会状況が分かる文書を表示します。虚無僧による金銭の強要等が横行することが度々あり、それを排除するための定書があります。また、桜井村は特定の座頭（盲目の人）に金銭を払って他の座頭の出入りを禁止したり、非人身分の人々に治安維持を任せたりしていた記録もあります。さらには、事故でしょうか、自殺、あるいは他殺だったかもしれません、人が坪井に落ちて死んでしまう等の事件の記録もあります。

第5話 和と洋のハイブリッド

—近代建築—

市域には、江戸時代にさかのぼる社寺や民家など伝統的な建築物が少なからず残されています。江戸時代中頃（17世紀後半～18世紀前半）に建てられた神谷家住宅もそのひとつで、和泉村の旧家の主屋として使われていました。半分以上の面積を占める広い土間や、天井を張らず小屋組がむき出しの点など古い民家としての要素が見られ、古来から続く建築の構造や形式を今伝えています。明治期になると、建築にも西洋風の建築方法が取り入れられるようになります。

第6話 三河国ここにはじまる

—桜井古墳群—

碧海台地上には、二子古墳・姫小川古墳をはじめとしたおよそ20基からなる桜井古墳群が存在します。これらの古墳が造られた古墳時代前期には、古墳群のすぐそばに南北約4kmにわたる大集落が営まれていました。この大集落からは全国各地の土器が出土しており、遠隔地との交流の拠点となっていたことが分かっています。桜井古墳群には、こうした大集落の有力者が葬られたと考えられます。この章では、ハツ塚古墳出土の銅鏡（東町町内会）、桜井古墳群には含まれませんが、北本郷古墳出土の鉄剣・銅鏡・玉類（和泉町内会）などを展示し、桜井古墳群を紹介します。また、日本最古級の横櫓等も展示し、当時の人々の生活にも触れます。



ハツ塚古墳出土銅鏡（東町町内会）



旧明治郵便局舎（和泉町所在）

第7話 生きた化石

—2つのイチヨウ—

自然枯死や災害・伐採などを免れて、現在まで残る大樹が市内には数多くあります。イチヨウは、多くの人が良く知る身近な樹木です。鴨の足に似た形の葉に特徴があり、秋には黄色に美しく色づきます。この章では、樹齢300年の堀内町の雌木と東端町西蓮寺の雄木の2本のイチヨウの巨樹を紹介します。

春の企画展

安城の文化財 —モノ語り名品展Ⅲ—

（文責・後藤 麻里絵）

会期：平成28年4月16日(土)～7月3日(日) 観覧無料

安城市歴史博物館では、指定文化財をすべて紹介する展覧会を全5回のシリーズで企画しています。今回で3回目を数えます。今回は、7つの「モノ語り」から指定文化財を紹介します。

第1話 本願寺興隆

—歴代宗主の肖像—

三河で本願寺の勢力が大きくなるのは、室町時代中期、本願寺8代蓮如の布教がきっかけでした。市内には、蓮如により寺院・道場に下付された十字名号や六字名号が数多く残されています。蓮如の跡を継いだ9代実如も、方便法身尊像（阿弥陀如来絵像）を門徒に広く下付しました。本願寺は教団をより強固なものにするため、宗主の血縁・親族を各地に派遣しま

第2話 松泥棒現る

—村絵図—

江戸時代、安城が原や五か野原は秣（牛馬の飼料）や草肥、建築用材や燃料用材などの供給地として利用されました。安城が原では、有用性の高い松の植林が行われたり、領主林である御林が設置されたりしました。天明7年(1787)の安城村絵図には、安城が原の中に松林があり、そこには区画された

御林も描かれています。しかしこうした原山は利用価値が高いため、境界をめぐる争いが度々起こりました。五か野原は、桜井村地内にありましたが、桜井村・和泉村・城ヶ入村・中根村・小川村の5つの村の入会地でした。管理や利用方法が決められていましたが、松木の盗伐など度々争いが起こりました。この章では、種々の安城村絵図（西尾町内会）や、五か野原の利用に関して記された菩提寺文書（菩提寺）等から原山の利用について紹介します。

※展示期間中に展示替えがあります。



天明7年安城村絵図写 御林部分（西尾町内会）

第3話 桜井村事件簿

—菩提寺文書—

古文書には、書かれた当時の社会状況を読み取れるものが多くあります。この章では、菩提寺文書（菩提寺）から、江戸時代

2015年
12月開催

松平シンポジウム

第6回松平シンポジウム

今度、駿河没落ー今川氏の滅亡と三河ー

日時：平成27年12月13日（日）13時～17時
場所：安城市歴史博物館・トランスホール

文責・三島一信

はじめに

平成27年12月13日の日曜日、歴史博物館エントランスホールにおいて、第6回松平シンポジウム「今度、駿河没落ー今川氏の滅亡と三河ー」を開催しました。

さて、今回は、三河を統一した家康が遠江に勢力を伸ばし、今川氏を滅亡に追い込む時期、永禄7年4月から、同12年3月（1564～69）の掛川城明け渡しまでを対象としました。タイトルの「今度、駿河没落」とは、この今川滅亡を表しています。出典の『松平記』には「一、今度駿河没落の時家康一腹の弟松平源三郎…」とあり、今川家中が混乱して没落していく状況が「今度、駿河没落」で表現されています。

昨年同様、コーディネーター（司会）に播磨良紀氏（中京大学教授）、パネラーには、久保田昌希氏（駒沢大学副学長）、平野明夫氏（駒沢大学講師）、岡田正人氏（歴史研究家）を迎え、基調報告、そして討論という形でシンポジウムが進められました。

シンポジウム

討論では、会場やコーディネーターからの質問などをパネラーが回答する形で進められました。

まず、今川氏弱体化の理由について久保田氏は、桶狭間の戦い以前の永禄元年には氏真が今川家を継いでいながら、隠居した義元が三河支配の中心に行っている。桶狭間での義元の死は大打撃であった。その危機感をもって氏真が三河支配にあたったが、今川家中、領国内での内紛が遠州念劇となつてあらわれた、としました。

これに関連して、桶狭間の戦いで有力武将の死の影響についての質問に対して、久保田氏は、長篠の戦いでの武田のダメーじと同じで、今川家臣団の崩壊があつた、としました。

早い段階からの武田・徳川の工作・攻略の有無についての質問に久保田氏は、確証がないながら信玄が攻略をすすめていたと思われること、仮説として始まりは桶狭間の戦いが重要なポイントであろう、としました。

コーディネーターから平野・岡田氏の織田・徳川同盟の重要度の相違、家康・信玄関係での織田の介在の有無について論点が示されました。久保田氏は、遠江侵攻時に信玄の家臣秋山が遠江に入ってきたことに対する家康のクレームは、信長の了承を得た上で家康から信玄に出したのではとし、岡田氏も同様としました。平野氏は当時の家康は信長ではなく、將軍足利義昭の命令に従うとし、家康・信玄の間の直接的な交渉としました。

また、家康の遠江侵入の意義について、久保田氏は、桶狭間の戦い後、家康は武田・今川・北条の三国同盟の破綻を見極めて東漸策に打つて出たとしました。平野氏も同じく桶狭間の戦いの影響が大きいとした。岡田氏は織田・武田同盟の中で信長は、信玄の駿河侵入は認め、遠江侵入は認めていなかったとしました。

最後に、会場の村岡幹生氏（中京大学教授）は徳川の遠江支配の正統性についての議論がなかった点を挙げられ、今川氏の遠江統治権を徳川が継承する正統性を得る動きを考察すべきと提唱されました。平野氏が言うように、家康が源姓と認識していたことも、足利の傍流としての正統性の主張に含まれるのではとのコメントがありました。

来年度は、遠江まで支配下に置いた家康が直接武田と対峙する時期を対象とする予定です。特に奥三河での徳川・武田の対立に新たな視点が出てくることを期待しています。



播磨良紀氏
中京大学教授



久保田報告



久保田 昌希 氏
駒沢大学副学長

最初に久保田氏が「今川と武田の動向についてー永禄7年4月～永禄12年3月までー」という題で報告されました。

三河一向一揆の時に今川氏真が一揆方に加担できなかったのは、永禄6年12月頃から同9年の遠州念劇があつたため。その後、9年から11年にかけては三遠国境が政治的に混乱していた。

この時期、今川氏真は武田・北条との三国同盟を維持しながらも上杉との交渉を進め、武田の背後をけん制しようとしていたがうまくいかなかったことや、永禄11年3月24日に寿桂尼の死が今川氏の弱体化の要因の一つである。

武田信玄は永禄6年から8年くらいの間に今川領国を奪う構想をしていたと考えられ、最近の丸島和洋氏の研究から、遠州念劇の頃が駿甲同盟のターニングポイントである。これは、永禄8年の信長娘と武田勝頼の婚約の動きの中にも見られる。武田の今川領国の侵攻の過程は、永禄11年8月16日から計画され、同年12月6日に信玄は甲府を出発、富士川を南下し、そして同月13日、駿府城を攻めとつた。

この間、家康と信玄の今川領国侵攻の取り決めが想定され、信玄にとって家康の背後には信長の存在を認識していた、としました。

平野報告



平野 明夫 氏
駒沢大学講師

次の平野氏は「徳川家康の三河支配」という題で報告されました。

引馬（浜松市）の飯尾の反乱（遠州念劇）は、家康による飯尾への働きかけがあり、東三河を治めるための陽動作戦だったと考えられる。永禄8年の東三河平定後、家康はすぐに遠江への侵出はせず、東三河平定時に遠江の領主達と連絡を取りあつている。久保田氏同様、武田信玄と家康との約束があつた上で、永禄11年に遠江へ侵出した。

三河一国を治める、支配を行っていくための権威として叙爵、つまり従五位下三河守を家康が獲得したとし、獲得の経緯を追及。「三河守」の称号はこの頃には名目的な称号だが、それを手に入れることで家康が三河の正統な支配者であることを宣言したと考えられる。当時武家の叙爵は足利將軍が窓口であつたが、永禄8、9年は將軍不在の時期で、家康は、おそらく岡崎の誓願寺の泰翁を仲介として、公家で藤原氏の氏長者の関白近衛前久に依頼し、その推薦によって獲得した。

ここで徳川氏は近衛家の昔の家来として推薦されている。氏長者は家来を五位以上に推薦できる制度の「氏爵」があり、この時徳川は藤原姓で叙爵したと思われる。家康の叙爵では織田信長との関係はみられない。さらに家康の叙爵によつて名実ともに戦国大名となったと考えられる、としました。

岡田報告



岡田 正人 氏
歴史研究家

岡田氏は「織田信長の上洛と東国諸大名との同盟・婚姻関係ー永禄後期を中心にー」という題で、永禄10年の美濃統一、同11年9月の足利義昭を奉じての上洛の経緯についての事実を確認、そして婚姻関係について述べられました。

永禄4、5年あたりの織田・徳川同盟での信長娘五徳と家康嫡子信康との婚姻。永禄8年8月の信長養女と武田勝頼の婚姻。この婚姻により織田・武田が同盟関係になる。そして、信玄娘松姫と信長の息子信忠の婚姻による二重の婚姻関係によって強固な同盟関係をもたらすはずであつたが、信玄の裏切り、家康領国への侵入によって、破棄された。信長にとっては許しがたい行為であつた。さらに信長は上杉謙信との同盟を永禄6、7年頃に結ぼうとして、自分の息子を上杉家の養子にさせてほしいと申し入れている。これらの同盟関係の構築は美濃攻略の前に行われ、美濃を取り巻くような大名と同盟を結んで美濃攻略をスムーズに遂行する目的であつた。

また、今川滅亡時の今川氏と織田氏は、同盟関係はないが敵対はしていなかった、としました。

村絵図を歩くXVI

最終回

文責 館長 高山忠士



〔図1〕天保3年(1832)小川村絵図部分

これまで小川村の西に広がる碧海台地に当たる部分や集落の辺りを歩いてきました。今回は、小川村の大きな部分を占める矢作川から鹿乗川にかけての辺りを歩いてみたいと思います。図1の矢作川から鹿乗川にかけての地域です。

全体に、矢作川に近い東側に黄色に塗られた畑地が広がり、鹿乗川に近い西側に田が広がっています。矢作川に近い東側が高く、鹿乗川に近い西側の土地の方が低いことがよく分かります。矢作川沿いに、北から南にかけて、大帳、福地、天神、小向といった集落が描かれていますが、これらの集落が矢作川中流域の自然堤防上に位置していることがよく分かります。現在も、これらの集落の西辺りには、広い畑地が広がり、ハウスや露地で野菜作りが盛んに行われています。(写真1)

福地の集落の西から南西にかけて四角く縁取られ、黄色く表された「島畑」がたくさんみられます。水田が広がる中に、部分的に高い部分が畑として利用され、この地域特有の島畑景観を成していたことがよく分かります。平野ではあっても沖積地の中には自然堤防、後背湿地など所によって結構凹凸があったことが分かります。

矢作川沿いには赤茶色で彩られた太い道が描かれています。その道の一番北に「堤」と書かれているところを見ると、現在と同じように堤防上に道が設けられていたのでしょう。

注目すべきことは、大帳の集落から北に向かう堤防の東側にもやや細い道が描かれていることです。これも堤防だったと思われるです。この部分は二重堤防になっていたでしょう。二重堤防に囲まれた所は、現在川成という小字で、大帳の墓地沿いの村高用水と矢作川の堤防に挟まれた辺りになります。

東側の堤防が畑地に沿って築かれていることを考えると、川成の辺りは、西側の堤防の外側にたまった州を耕地化する過程で東側の堤防を築き、二重堤防にしたものと考えられます。この辺りは、北東方面からまっすぐ流れてきた矢作川筋が、南東方面へ急に流れを変える地点になります。流れの攻撃面(写真2)になる所で、堤防が決潰しやすい場所でもあります。二重堤防にしたのはそんなわけもあるのかもしれませんが。

西側の堤防は現在跡形もありません。しかし、周囲の状況をよく観察してみると、図1のAの辺りに、熱田神社があります。熱田神社の境内地を南側から見ると(写真3)ちょうど堤防の断面のように見えます。熱田神社がいつ頃から現在地に鎮座するの記録にはありません。しかし、ひよこするとこの絵図の描かれた後に行われた河川改修で、矢作川の川幅が広げられ、東側の堤防が高く築かれ、西側の堤防が不要になった折に現在地に移されたのではないかと考えられます。この辺りの堤防の高さは、

江戸時代には3メートル程だったと伝えられています。ちょうど熱田神社の境内地が江戸時代の堤防の跡地であつてもおかしくありません。神社の境内地は水害の時の避難場所にもなる高みです。どこかにそんな記録が残っていないでしょうか。

さて、絵図に戻ります。東側の堤防には測^すり^{だて}留^どまり^{いり}があります。堤防の下をくぐらせて矢作川の水を取り入れていることが分かります。矢作川から取り入れた水は川成にある池にたまり、用水溝を通じて次の池に導かれ、さらに西側の堤防の下をくぐって大帳の北で二手に分かれ、矢作川から鹿乗川にかけての広い地域で利用されていたことが分かります。

ところで、福地の集落の東の堤防外(川の側)に石出と書かれた突起が見られます。石組みの突堤であつたようです。2本の突堤の間に、土場と呼ばれる、川船で運ぶ荷物の積み卸しをする船着き場があつたということです。矢作川の水運では、上流から建築用材や、燃料材、木炭

などが運ばれ、下流からは塩や肥料用の干鰯、あるいは味噌や醤油、土管や瓦などが運ばれました。当時の矢作川水運は西三河の物流の大動脈で、福地の土場はその物流拠点の一つとして重要な場所であつたということです。ここには対岸への渡しもあり、今ではちよつと考えられない賑わいがあつたところです。

用水にしても水運にしても、矢作川はこの地域の人々の暮らしになくてはならない、まさに母なる川であつたわけです。さて、母なる矢作川は慈母でばかりであつたわけではありません。時にはこの地の人々の生活を脅かすこともありまし^た。鹿乗川の湛水のことには先回触れましたが、矢作川の堤防が決潰すればさらに大きな被害がもたらされました。

16世紀なかばから、20世紀にかけて、450年ほどの間に記録に残るものだけでも68回の水害があつたということです。ちなみに桜井神社の古記録に、寛政元年⁽¹⁷⁸⁹⁾6月矢作川の各所で破堤、この辺りでも70日間も水が引かなかつたとあります。また、文化11年⁽¹⁸¹⁴⁾には6月の終わりに対岸の青野村や、大帳ほか各地で堤が決潰し、甚大な被害を出し、嘉永2年⁽¹⁸⁴⁸⁾にはさらにそれを上回る災害だつたと伝わっています。今でも、石垣を築いた上に屋敷を構える家々が多く見られるのは、水害から身を守る工夫の一つでしょう。(写真4)

再び絵図に戻ります。石出のある堤防の南の内側に張り付くように小さな集落(B)が描か



〔写真1〕大帳の東辺り
川島から寺領へ抜ける道の周辺には畑地が続く



〔写真2〕川成の南端
左端から手前の辺りが攻撃面に当たる



〔写真3〕熱田神社
周囲から独立した台地上の境内地になつてゐる



〔写真4〕福地の集落
この辺りには石垣でかさ上げした屋敷が多く見られる



参考文献等
・『小川の歴史をさぐる』
小川町郷土史料行会
・『小川村福地のあゆみ』
福地のあゆみ編集委員会